

タイトル「これからの自立援助ホームの展望」

～未来を担う若い世代の思いと希望～

【企画・実施にあたって】

自立援助ホーム数も増え、取り巻く環境も少しずつ変わり「自立援助ホームとは何か？」と考える機会が増えてきました。そんな時、先輩の話もありがたいのですが、「自分はなぜこの仕事に就いたのか？」という自分の初心を思い出させてくれる次世代の話を聞くことで、何か感じることがあるのではないかと考え企画しました。

等身大の彼らの話を通して、「自分の初心」を思い出したり、そこから今、対面している子どもたちとの関わりに思いを馳せていただけると幸いです。

広報委員 松木 良介



聞き手：松木良介（まつき りょうすけ）

1976年 富山県生まれ。 1999年日本社会事業大学を卒業。

1999年 青少年福祉センター新宿寮入職。

2008年 湘南つばさの家に入職。

2011年～憩いの家に勤務。現在、経堂 憩いの家ホーム長。

好きな言葉「I'm OK, you're OK.」

趣味「登山とトレイルランニング。」

100マイル（160Km）レース完走を目標に高尾山の近辺を走っている。



参加者：江尻飛鳥（えじり あすか）

・1984年 茨城県生まれ。

・2007年 茨城キリスト教大学 大学院卒業。

・2007年～2009年

常陸太田市教育委員会嘱託職員（電話相談員）

・2010年～2012年

ひたちなか市教育委員会嘱託職員（電話相談員）

・2011年～NPO法人青少年の自立を支える会シオンに入職。

現在、同法人の自立援助ホーム えがおの家 ホーム長。

・ホームの好きなところ「ほのぼのとした環境で生活できる場所」

・現在の楽しみ：「娘をお風呂にいれること」

「自宅の庭を“トトロの森”のようにすること」



参加者：齊藤慎一郎（さいとう しんいちろう）

- ・1983年 埼玉県生まれ
- ・2008年 東京福祉大学 卒業
- ・2008年 児童養護施設入職
- ・2009年 自立援助ホーム 夢舞台 入職
- ・趣味

「国内・海外旅行」・・・年に1度は遠くへ行きたい。

「美味しいお酒探し」・・・全国にお邪魔させていただいた際には

ご紹介下さい。

- ・ホームの好きなおところ

「ボランティアさん、スタッフの食事が美味しい」



参加者：志村亜希子（しむら あきこ）

- ・1979年 東京都生まれ
高校卒業後、接客業や一般企業での事務職に就きOL時代を過ごす。
- ・2007年 東京都の自立援助ホームに入職
- ・2013年～「樹の下ホーム」入職。
- ・趣味「旅行、読書、映画鑑賞、絵画鑑賞」
- ・好きな場所「海、ときどき山。景色のきれいな所」
- ・ホームの好きなおところ
「新しいことにチャレンジさせてもらえたり、それぞれが主体的に動けるチャンスがあるところ。」
- ・一児の母親としても、とにかく忙しい毎日ですが、休みは手を抜かずに遊んでいます。時間が足りないくらい充実しています。

松木

「今日はよろしくお願ひします。まずは自己紹介から、お願ひします。」

江尻

「自立援助ホーム『みらい』のスタッフを勤め、現在同じ法人の『えがおの家』のホーム長をしています、江尻です。『みらい』から数えると勤続5年になります。

学生時代は心理学を勉強していて卒業後、不登校の子ども達の相談員をしていた時に、『みらい』のホーム長、水野から誘われ入職することになりました。」

齋藤

「夢舞台 齋藤です。勤務して6年目になります。

児童養護施設の職員を経て、『夢舞台』の開所から勤務しています。」

志村

「『樹の下ホーム』に勤務して3年になります、志村です。自立援助ホーム勤務は通算で6年目になります。」

松木

「入職のきっかけ（児童福祉施設の中で自立援助ホームを選んだ理由）を教えてください。」

江尻

「実は高校生の時にクラスメイトを殴ってしまったことがあって・・・。

その時に、何度も何度も先生から連日、聞き取りをされたんですけど、それが、どっちの手で何発殴ったのかって、まるで取調べみたいで。(笑)

どうして“殴った理由”を誰も訊いてくれないんだろうって思ったんです。

そんな経験もあって、自分は十代後半の子ども達の話をして聞いて、寄り添える大人になりたいって思いがあったんですね。

そして、不登校の子ども達の相談業務をやっていた時、ホーム長の水野に誘われました。」

齋藤

「僕は、15歳から働いていて、十八歳で定時制高校に進みました。学校に通いながら養護学校（現在の特別支援学校）の学童保育の指導員をしていたんです。

その時に障がいをもつ子どもを抱えて働く親の実情と、現行制度に疑問を感じて、そんな家族の支援をしたい、と障がいについて学べる大学の保育学科に進みました。

大学の時、児童養護施設での実習を経験して、その職に魅力を感じ、卒業後、職員として就職をしました。しかし、いろいろ考えて養護施設を退職することになった時に、職場の先輩から自立援助ホーム『夢舞台』がスタッフ募集している、と聞いて実情も知らずに入職しました。」



志村

「なんで自立援助ホームかって言われると、誘われたのが自立援助ホームだったから・・・ってなっちゃうんですけど。(笑)

誘われるまで、自立援助ホームの存在を知らませんでした。

私も当事者として社会的養護を経験していて、高校時代に先生から「自分が受けたものは、返していかなくてはいけない」って言われ、ぼんやり意識はしていました。ただ、精神的なタフさが必要な仕事なのは分かっていたので、社会に出ていろんな人の話も聞いて準備したいと思いながら、別の仕事をしていました。

そんな時に、自立援助ホームを立ち上げるので一緒にやらないか、と誘われました。

実情は良く分からなかったけど、時は来たっていうか、自分が思っていたタイミングで誘いがありました。」

松木

「入職前とのギャップはありましたか？」

江尻

「イメージしていた以上に、“何でも屋” だなんて。

帰宅した子どもと夕飯を食べながら、その日あったことを話すような、もっと穏やかな時間が流れると思っていたんです。でも、実際は毎日何が起きるかわからないびっくり箱みみたいな生活ですね。

一緒に畑仕事をしたり、夜中に呼び出されたり、ということは予想してなかったです。

でも、それが一緒に生きるってことで、畑仕事にしても一緒に時間を共有するから分かることもありますし、自分でも割り切れなくなる位、相手との距離が近くなる大変さもあります。

関係が密になればなるほど、腹が立つこともあるし、「素」の自分と対峙させられます。

例えるなら、前職（児童相談員）では竹刀で試合をしていたのが、今は素手で組み合ってる感じがしますね。(笑)」



齊藤

「児童養護施設の「養育」と自立援助ホームの「相談援助」のギャップの大きさは感じました。

児童養護施設では、子どもが失敗しないように大人が転ばぬ先の杖になることが多いんです。

その生活の癖が抜けなかったのが、(入職当時) ホームの子にとってはかなり「ウザイ奴」だったと思うんですよね。そんなこともあって、入居中の女子に2年半くらい無視されてましたね。超辛かったです。(笑)

それと、1年目は、給料分の仕事をしなければならなくて、強く思っていたので、何でも吸収したくて、あちこちのホームを回って話を聞いたりしました。

でも、いろんなホームの話を聞くと、どこのホームも情熱がすごくて、聞けばきくほど逆に重荷になってしまった時期がありました。(笑)

そこで感じたことは、この世界に入職する人たちの“思い”は強いと思います。その“思い”を大切にしながら続けていけたら素敵だと思いますね。」



志村

「入職前は、あんまり思い描いてなかったです。

でも、最初に来た子が知的障がいと、精神の障がいと、とにかくいろいろ抱えている子でかなり大変でした。

自傷行為もあるし、入退院も繰り返して、この子が自立援助ホームの対象なのか、と思いましたがでも他にいくところがない訳で・・・。

これは専門的な知識が必要だなって思いました。

20歳までの関わりっていうのがひとつ焦りにもなったし、自分の生活にも影響が出て、かなりしんどかったですね。」



松木

「お互いの距離の近さ、生活を共にするっていうのが、自立援助ホームの特徴でもありますよね。だから御自身の生活にも影響がでちゃう、なんて話もありましたけど、皆さんの家族構成含め、プライベートとホームでの生活の関係性について教えてください。」

江尻

「現在、妻と子どもが一人います。

以前は、家に帰ってもホームでの気持ちを引き摺ってしまって、通勤の時に気が重くなってしまったりしていました。でも段々とホームとプライベートとのスイッチの切り替えができるようになってきましたね。」

齊藤

「昨年結婚しました。

帰りが遅い、とか宿直が多いことで妻は心配していますね。でも、心配しながらも僕の好きなことをさせてくれています。給与の面も含めてこの仕事は家族の理解が必要ですね。

夢舞台は、原則として子どもと連絡先の交換はホーム長だけなので、プライベートは守られているな、と思います。」

志村

「夫と子どもがいます。

入職して一年目は独身でしたし、自宅に帰ってからもホームでのことを引き摺って、家から出たくなくなるようなこともあったけど、今はそれもなくなりました。今は仕事と私生活を切り離して考えられるようになりましたね。」

松木

「入職当時はプライベートでもホームでの出来事を引き摺ってしまっていたのに、今は切り替えができるようになった、とのことですが、自分が変わったきっかけだと思うところはありますか。」

江尻

「以前は解決しない悩みを、ただただ考えて時間を使っていたんです。

でも今は、どうにもならないことで悩むのは止めようって、思えるようになりましたね。」

齊藤

「経験を重ねてきたのが、自信になったんだと思います。

あとは、同じホームのスタッフや自立援助ホーム仲間と苦労話を共有できる、というのが大きいです。1年目は大変なことも多くて、ストレスで禿げるんじゃないか、そしたら労災だなんて思いました。(笑)」

志村

「最初が大変なケースだったので、それを乗り越えたのは大きかったですね。

また、長く苦しい環境からやっと助け出された子ども達の人生に関わることができる、と思うと自分がしっかりしようと思えます。最初が大変なケースで、逆に今は良かったなと思えます。」

松木

「労働環境的な苦労はありますか。」

江尻

「娘ができて、家に帰りたい気持ちが大きくなってきたので、泊まりを減らせたらいいな、と思います。

また、平成28年度は新規採用者も入るので、全体のお給料もあがっていくようにしなきゃな、と思ってますね。自分は、たくさん研修で外に出してもらって、それが良かったので新規採用の人達を今度はどんどん外に出してあげたいなって思います。」

齊藤

「昨年、スタッフの退職と入院が重なり、スタッフ体制が危機的状況にありました。

スタッフ不足は子ども達の処遇にも影響がでるし、もう一人分の人件費を制度として加算されたら、と強く思いますね。

いざ、困った！という時に頼れるもう一人のスタッフがいてくれたら、すごく安心感があるし、新しい事業拡大や、いろんな可能性が出てくるな、と思います。」

志村

「育児もあるので、私は週に一回の宿直にしてもらっていますが、その分、他のスタッフにしわ寄せがあるようで肩身が狭いです。人員不足は常に感じますね。

ホームでは子ども達の病気とか、問題が突発的に起きますよね。

そういう時にスタッフが一人しかいないと、すぐに対応できない辛さがあります。

お給料は徐々にあがってきたのでありがたいです。」

松木

「最後に、この仕事のやりがいと自立援助ホームの未来についてどう考えますか。」

江尻

「やりがいって何だろうってずっと考えていたんですけど・・・。

ホームの子が稀に、本当に稀になんですけど、自分から僕の食器を洗ってくれたり、ご飯をよそってくれたりする奇跡が起きて。(笑)それが、すごく嬉しいんです。

今、自分が子どもをもって痛感していることなんですけど、子どもを育てるにはたくさんの周りのサポートがいるんですね。

でも、自立援助ホームの子ども達って周囲の支援を受けにくい子だと思うんです。

子ども達の人生は当然、20歳で終わらないですから、その先の長い人生も彼らに寄り添って、彼らの人生をサポートできるようにしたいですね。」

齊藤

「自分は、同じ課題、同じ思いを共有できる人がいたから、辞めずにこれたんだなって思っています。

誰かと繋がるっていう実感が大切に、自分は研修にたくさん行かせてもらって、仲間と苦労話を共有できたことが大きかったです。

もし1年目のスタッフが息苦しさを感じていたとしたら、どんどん外に出て仲間と繋がるといいと思います。

自立援助ホームの今後は、就労に特化した形だけでなく、就学や家庭裁判所からの補導委託先、精神疾患を抱える子への治療的アプローチ、高齢児童の一時保護先など、多様性が必要になってくると思います。

また、スタッフがジョブコーチの資格をとって就労支援するとか、人材不足が常態化しているので新しい人材を繋ぐために、大学の相談・援助の実習先として認可してもらえないか、など行政にアピールしていく必要があると思います。

今後、どうやって自立援助ホームを継続させていくのかを考えると、人材育成できる環境の整備を協議会に強く期待したいです。」



志村

「先週もホームの子に、すごい暴言を吐かれたりしましたけど、その怒りっていうのは、その子の人生の中のほんの一部だと思うんですよね。その子とやり合ったとしても、“まあ、そんな日もあるか”って思えるようになったのは、自分が母親になったというのも大きいのかもしれません。

スタッフがチームで子ども達と関わることで、続けてこれたと思いますね。

入居してくる子って、全員って言ってもいいくらい自己肯定感の低さとか、課題を抱えているんですけど、自立する時には多少の自信をもってくれたのかな、って感じられると自分が関わってきた意味を実感できますね。それに退居してからも連絡をくれる子もいて、心のどこかに私の存在があってくれるのかな、って思うとほっと感じます。

これだけいろんなケースの子が入居してくるようになって、子どもの最善の利益の保証を軸に考えた時、教育格差と貧困の連鎖は切っても切れないと思うんです。

自立援助ホームも就学支援も含めて、もっと子ども達に選択肢を与えられる柔軟さをもった多機能型は必要とされていけるように、と思いますね。」

【終わりに】

この度、広報委員会の特別企画、中堅スタッフによる座談会を企画させていただきました。
ご協力いただいた参加者、またその関係者の方々に、改めてお礼申し上げます。

『これからの自立援助ホームの展望』～未来を担う次世代の思いと希望～というテーマで、現役中堅スタッフの三名の方が、自分自身の思いを時に和やかに、また時に熱く語ってくれました。私自身振り返ると、先人の思いを聞く度に琴線に触れることで、度々心を熱くしたものです。それが、今の自分を支えてきた一つであり、大きなエネルギーになったことは間違いありません。今回の座談会による中堅スタッフのその思いは、将来の希望と不安が交錯する中で、先人の思いに勝るとも劣らず、聞きごたえのある内容となりました。子ども達との日々の暮らしの営みの中で、ほんの小さな優しさが大きな喜びとなり、同じ思いを共有できる仲間と繋がっているという実感が大切であり、子ども達にとって我々一人一人が尊い存在であり続けられるように、そんな思いが語られています。その内容は残念ながら、紙面上一部割愛させていただき、ここでご紹介できないものもありますが、全国で日々ホームの中で奮闘している多くの仲間達にご覧いただき、その思いを共有していただけることを心から期待しています。

広報委員長 夢舞台 新井秀親

撮影： 吾が家 大橋 達也

編集：マルコの家 野原 知子